



伊藤通明追悼号



2016・2・3

SORA 65号

千葉 原 友 子

初風や展望台は空のなか

紺碧を乱さぬ海や鋏始

一湾の風透きとほり白破魔矢

冬の水ひとたび堰かれ音を生む

閉園の曲白鳥の水尾に添ふ

京都 天 谷 翔 子

病室より見ゆる十字架雪しんしん

病院の灯の早々と寒雀

透けて骨見ゆる魚や冬ざるる

病室の大きな窓や冬夕焼

退院の夫へ風呂吹大根かな

大阪 井 上 和 子

紀の国の竈祓の煙出し

広げたる大きな翼初御空

小鼓の調べの緒の紅冬の月

小鳥くる神馬空つぽ飼葉桶

年寄りの詮ある言葉龍の玉

福岡 亀 井 紀 子

急磴の鎖は揺れて冬紅葉

また一軒空家となりぬ寒椿

をんな坂男坂あり冬桜

三社みな同じ祭神年新た

うすらひや隣家の夫と長話

福岡 白水良子

残りたる葉を見上げつつ落葉掃く
子の遺影より始めたる煤払ひ
花アロエ二本に庭の元気づく
葉牡丹を活けて床の間らしくなる
誰一人欠けず集へり女正月

新宮 井浦美佐子

人づてに師の訃を知りぬ帰り花
自動ドア開く度の風ポインセチア
箸二膳買ひし参道黄落期
旅客機の落暉を過るお元日
塗箸に少しの螺鈿冬日さす

東京 山田正子

しぐれ来る女坂から男坂
夕茜枯野の中の観覧車
行く秋や綻びかけし象の耳
短日や猫には猫の月日あり
角巻の中よりおつり朝の市

兵庫 森俊人

くねりたる未踏の径の落葉かな
鶴鴿について楼門くぐりたり
鳥立てり枯薦原のど真ん中
寒鳶の輪の中に立つ観世音
陵の森の青さや冬深し

北九州 横田敬子

境内にポストのありて神の留守

供へけり茎の曲りし庭の菊

山茶花や練堀多き城下町

青竹を宮司伐りたる年の暮

花八つ手門のみ残る武家屋敷

東京 今井春生

福引や見知らぬ人に拍手され

極月を忘れワイキキビーチかな

白菜や大地に達磨並ぶごと

鯛焼きの鯛誕生に立ち会へり

仰ぎ見る皇帝ダリアといふ高さ

福岡 吉村摂護

生と死の犇く星や去年今年

昇級の襟章光る年の暮

海冥く北極星が突き刺さる

迫り来る限界集落冬の虹

数へ日や亡き輩を指折りて

東京 古川夏子

霜月や山廬に四方の水の音

熊手売る女主の切り火かな

銭湯につかりて帰る三の酉

ぼろ市や眉毛一本長き香具師

朝まだき葱束降す神楽坂

空作品抄
柴田佐知子抽出

銅鏡の裏の神獸山眠る

湧水の真面目な水輪山眠る

父の声混じりてゐたる虎落笛

しぐるるや入江の多き博多古凶

亡き父の友に鯛焼おごらるる

足指に一捻りして注連を緬ふ

場所変ふる猪の箱罨トラックに



深川 淑枝

原 友子

高倉 和子

山本 則男

田中とし江

永淵 恵子

松山 暁子



雪の夜独りこの世の外に居り

冬帽子句帳に余白かなりあり

寒肥は篤く父在る日のやうに

学校のカーテンは白今朝の冬

屋根いつぱい母を迎ふる蒲団干す

また元の寒きところに白と杵

湯冷めして迷子になりし心地かな

男居て男手の無き年用意

大寒や手窪いつぱい飲む菓

狼は童話の中に生き不滅

どれか羽搏ちどこかが流れ鴨の陣

釣瓶なき井戸の竹蓋冬さるる

二日はや一人となりてしまひけり

吉田 穂

中田みなみ

戸栗末廣

曾根富久恵

林 徹也

千波 悠

天谷翔子

山内 碧

宮井知英

松田明子

岸 洋子

矢野百合子

田代貞枝

雪女郎夫を隠してしまひけり

大仏の衣のひだに雪残る

つはぶきの黄や否と言ふ勇氣欲し

指先で猫に薬を雪が降る

ほつほつと万歩あるきし葛湯かな

合掌の姿崩さず初日待つ

うかうかと過して今日の寒さかな

ほろ酔の夫買うて来し赤マフラー

冬うらら昼は寂しき漁師町

冬暖か撫でたるのみの百度石

冬銀河味方はひとりをればよい

野球部の自転車列息白し

厨の母揃ふ迄待つお屠蘇かな

石橋幾代

秋 千晴

田岡千章

岩下きぬ代

田代民子

田邊豊子

田坂能雄

窪みち子

横田敬子

西住三恵子

えとう樹里

苑 実耶

白水良子



故郷は都会となりぬ除夜の鐘

引く度に逃げてゆくなり糸糸玉

囲炉裏端客の数だけ岩魚立つ

枯葎短き綱に山羊つなぎ

強がりてひとり残され葱坊主

波動けど上下するのみ浮寝鳥

住み古りし村の一隅女郎蜘蛛

老いてより早寝早起き石路の花

花柎介護ホームへ往く別れ

熊手売り深川飯を掻つ込みぬ

転ぶ子の横を一気に運動会

鯖街道山を沈めし秋時雨

冬に入る庭師が縄を切る音も

仲里 奈央

押田 裕見子

今井 春生

小島 翠波

あさなが 捷

織田 高暢

井上 和子

野畑 小百合

上川 いつ子

山田 正子

後藤 園子

清水 量子

森 俊人

後継ぎの途絶えし寺や寒鴉

相輪の影の正しき秋の暮れ

おんおんと被爆地渡る除夜の鐘

古書市の日だまりに猫一葉忌

運動会子より大きな太鼓打つ

玉砂利に足音絶えぬ菊日和

冬隣頑固に富山の置き藁

手どもの殊にやさしきお正月

寒雀日蓮像と遊ぶごと

朧月や藁袋を抱き帰る

雀らのくひと引きをり注連飾

遠山を二つに分けて初日の出

荒地野やひねもす震へ冬葶

吉田悦子

田口萬智子

小谷一夫

わたなべ漣

日高孝

石川叔子

荻悠子

亀井紀子

小林朱夏

吉村摂護

岩井京子

桐山甫

遠山のり子



追羽根をつけば昔の音がせり

敷地より見ゆる初富士拝しけり

子ひとりの幸の果てなき柚子湯かな

神の樹のうづまきながら落葉せり

大白鳥さみしき首をのぼしけり

公園の蛇口の堅し冬ざくら

マスクして手ぶり大きくなりけり

百才の母と迎ふるお正月

晩鐘や落葉が山を温めをり

吉兆を浪速あきんど銭で買ふ

初詣千本鳥居朱に染まり

髪染めて師走の仕事すみにけり

焼餅を買うて来しのみ初詣

山口弘子

村上二三

乾有杏

植田洋子

岡村尚子

古川夏子

三輪敏夫

立花一枝

田中素直

橋本知笑

村上典子

ふじの茜

森真二

空作品評

柴田佐知子

湧水の真面目な水輪山眠る

原 友子

水輪は木の実や雨粒が水面に落ちた折などに生まれる。大方は何らかの理由によつて、その時だけ水輪がひろがるのだが、湧水は常に水底より水が湧きつぐ。つまり一時の休みもなく水面に水輪を描き続けるのである。それをへ真面目な水輪へとは面白い表現である。あらゆる方向から詠もうとする作者の意欲が素敵だ。

亡き父の友に鯛焼おごらるる

田中とし江

父上の幼友達かもしれない。作者のことも生まれた時から知っておられるのだろう。街中でばったり出会ったであろうか。作者がいくつになってもへ亡き父の友へにとつては、いつまでも子供なのである。おごつてもらったものがへ鯛焼へ」というのが、ほのぼのとした情感を醸し出している。

学校のカーテンは白今朝の冬

曾根富久恵

一気に詠み下ろした勢いのある句。説明を要しないほどに景が鮮明だ。作者は染色家である。へ学校のカーテンは白へ」と言い切った上五中七を受けるへ今朝の冬へ」がいい。季語の選択に作者の力量が見える。

また元の寒きところに白と杵

千波 悠

年末の餅搗きのために久しぶりに蔵の中から出てきた白と杵であろう。賑やかな時が過ぎると、きれいに洗われてもとの冷え切った処に戻される。へまた元のへ」という短い言葉の中に、次の餅搗きまで暗がり動くことのない白と杵の時間も詠みこまれている。

へ以下略へ

空集

柴田佐知子選

村役のうち揃ひたる出初式

枯れきつて紙の音する大地かな

立ち上る形に灌の凍りけり

手鏡の裏に母の名冬牡丹

道行の裾ひるがへる初芝居

雪の音確かめながら歩きけり

寝返りを打てば冬野に食み出しぬ

しぐるるや入江の多き博多古図

風花の馬の眼に消えゆけり

しぐるるや木肌の見ゆる禰宜の杵

風呂吹を少し崩して話し出す

姿見をくぐり抜け来し雪女郎

経堂にはたきかけたき小春かな

亡き父の友に鯛焼おごらるる

歳の市骨切包丁使ひ減り

飾り売り腕の長さで計りをり

向きあひて何か言ひたし三十日蕎麦

焼き牡蠣の爆ぜてどよめく小屋の内

銅鏡の裏の神獣山眠る

積藁の香に目覚めけり砧石

遠く聞く猪鬣の戸の落つる音

鼯鼠かけ月細ききのふけふ

鬼胡桃乗せ手のひらの山河とす

暗闇に山横たはる根深汁

パイ生地を寝かす間通るひとしぐれ

篝より星の生まるる除夜詣

湧水の真面目な水輪山眠る

青空へ溶け出してゐる冬桜

浜焚火はるかな漁場へ目を凝らし

寒鯉の溜め息積もる水の底

逆らはず冬の金魚となつて生く

父の声混じりてゐたる虎落笛

北九州

深川

淑枝

大宰府

山本

則男

千葉

原

友子

岡垣

田中とし江

福岡

高倉

和子

第二回飯田龍太受賞作品

土

戸栗末廣

井戸水のはじめは濁り杜若

藻のいろの波打ち寄する旧端午

麦秋やひろびろ使ふ六畳間

夏の月雲かたよせて上りけり

牛蛙鳴いてさざ波立ちにけり

写真の父いつも野良着や夏の雨



一本の草を伝ひて滴れる

夕焼に農具しばらく掛けておく

降り出して土の匂ひの地藏盆

濁流のあとの草はら小鳥来る

音立てて薬草かわく秋彼岸

綿虫や馬飼ふことを思ひし日

きさらぎや文机に聞く鳥のこゑ

剪定のこの樹三人掛りなり

茎立のまはりの土の痩せみたる